大震災！いま新しいまちづくり
～「わかる」は「かわる」こと～

目次

Ⅰ　講座の記録

第一回　2月9日

話しの流れ

・あの日あの時を忘れない……5

・分かち合い……6

・沈黙する春……9

・きつねにだまされる……11

・グローバリゼーション……12

・アンラーン「unlearn」……14

・放射能についての基礎知識や今後の対応……16

・コミュニティ評価委員会の報告から……18

・到達しない目標……19

（平和・人格の完成・まちづくり…）

・質疑応答……21

第二回　2月10日

・「わかる」は「かわる」……23

・「unlearnってなんだろう」……24

・交換のやり方……25

・グループディスカッション1……29

（昨日の振り返りと新たな質問など）

・向き合う関係……32

・グループディスカッション2……37

（コミセンのことをみんなで考えよう）

・朝岡先生のまとめ……39

Ⅱ　資料

1　市民学習会アンケート（感想）

第一回……42

第二回……44

2　タイムスケジュール……46

3　チラシ……47

大震災！いま新しいまちづくり
～「わかる」は「かわる」こと～

はじめに

今回の学習会を担当しております高橋と申します。今日はお忙しい中たくさんの方に集まっていただきまして本当にありがとうございます。今日お話してくださる朝岡先生をご紹介します。

私はけやきコミュニティ協議会の運営委員もしております。そこでいろんな悩み、壁等に当たったときに、たまたま朝岡先生と知り合いまして、いろいろ話を伺いながら進んできたという経緯があります。いつからなのかなと思って昨日調べてみましたら、２００３年にはじめてお会いしていました。

この協働推進のための市民学習会は、今年度で3年目です。今回は3年目の最後の講座です。いままで、市との協働あるいは団体どうしの協働、あるいはその団体が生まれたわけ、活動してきた経緯など、たくさんのお話を伺いながら勉強してきました。

それを生かして、大震災、3・11を市民学習として、市民の地域での実践からいろいろなことを学び考えました。またそれを次につなげていけるようにということで、今日は朝岡先生にお話しいただこうということになりました。

いろいろな地域で活動なさっている方が多いかと思いますが、次の活動につなげられるように今日の講座を生かしていけたらという風に思っております。今日はよろしくお願いいたします。

ＮＰＯ法人　武蔵野市ＮＰＯ・市民活動ネットワーク
市民活動サロン活性化交流・勉強会事業担当理事
高橋　優子

I

講座の記録

震災（あの日あの時を忘れない）「分かち合う」
分かち合いの精神を定着させよう

講師：朝岡 幸彦 先生

（あさおか　ゆきひこ）

新潟県出身
東京農工大学大学院　農学研究院　教授　教育学博士
環境教育領域を中心に持続可能な開発のための教育に関する
総合的な研究を行う
日本環境教育学会事務局長
府中市環境審議会会長
日本社会教育学会事務局長　などを歴任
第三期武蔵野市コミュニティ評価委員会副委員長

第一回　2月9日

～グループディスカッション～

「3月11日あなたはどこでなにをしていましたか？」について自己紹介をかねて話し合う

あの日あの時を忘れない

ただ今ご紹介いただきました農工大の朝岡です。農工大っていうと、農耕大だと思われて、東京農業大学とよく間違えられるんですが、正式には東京農工大学で、「こう」は工業の工なんですね。ここにご出席の部長さんと先ほどお話しましたら、農工大のOBだということがわかりました。武蔵野市にも農工大のOB、OGがたくさんいますので、ぜひよろしくお願いします。

どうでしたか。思い出しましたか。「あの日あの時」。「あの時」というのが大事なんですね。私は自分の研究室にいましたので、ほとんど大変な目には遭っていないんですけれども、その後が大変でした。スーパーに行っても食べ物がなくなるわ、ガソリンがなくなるわ。ガソリンを順番待ちしている車で渋滞がひどいわ。それから一番私がこたえたのは、暑かったですね。私の職場は、節電のために、エアコンを入れるのが許可制になっていまして、動物とか実験装置が最優先で、人間は後回し。私の研究室はとうとう夏の間一回もエアコン入れられなかったんです。その代わり急いで網戸を買いました。網戸と扇風機でしのいでいたんです。とにかく暑い夏でしたね。ただ、いま原発54基のうち可動しているのは4基、もう3基になっていて、春にはゼロになるということですが、それでも（生活）できちゃうんですね。これはまたちょっと意外だなって思いますね。

それで皆さんに「あの日あの時」のことを振り返っていただいたのは理由があるんですね。実はちょうど一週間ほど前に、私の大学で複数の先生と一緒に地域計画の授業をやりました。教員が全員集まって、お互いに言い残したことを議論して、最後に学生たちの質問を受け付けたんです。その質問のなかで一つだけ気になる質問があったんです。それは、一人の男子学生が二つのこと聞いたんです。一つは、「3月11日以降、日本は変わってないんじゃないかと思います」、もう一つは「原子力発電所は動かしていても止めていても危ないことには変わりないので動かした方がいいんじゃないでしょうか」と言うんです。

皆さんどう答えますか。その学生、僕は見込みがあると思ったんです。そういう質問をすること自体、非常に物事を考えていると思ったから、違う方向に勉強されても困るので、つい言ったんですね。

一つは、「3月11日以降日本は変わっていないと思う、と君は言ったけれども本当にそう思うかい。僕は変わったと思う。だけども、もうしばらくたつと、また3・11がくる。そしてその一年後にまた3・11がくる。その時々で思い出すかもしれないけれど、だんだんだんみんな忘れてしまうだろう。この記憶を忘れてしまったら変わらないだろう。あの時の事をずうっーと忘れないで、自分は何をすべきだったのか、そしてこれから何をすべきなのかということを考え続ければ変わるんじゃないの。だから変わったかどうかっていうのは、これからの私たちの行く末にかかわっているんだよ」って、かっこいいこと言ったんですね。だから「忘れない」ということが、実は今日の私の話の一つのキーワードなんです。

それから原発のことはね、僕はちょっとムッとしたんです。「それ誰から聞いたか、誰が言っていたかよく思い出してごらん。もし動かしていても、動かさなくてもリスクは同じだということであれば、何で浜岡原発止めたの。理由があったから止めたんだよね」

先日、農工大で福島第一原発と浜岡原発の原子炉の基本設計をやった先生を呼んで、原発問題の学習会をやりました。止めても放射能を帯びた崩壊熱がありますから。崩壊熱は数十年ではすまないかもしれない。ものによっては10万年ぐらい面倒見なきゃいけない。そう考えると確かに止めたからといって安心できないんだけれども、動かしているよりは、止めている方が安全だというのは誰がどう考えてもはっきりしている。でも浜岡原発を止めたということを忘れてしまっているから、動かしても止めても一緒、リスクがあるんだから動かしてもいいんじゃないという話になると思ったんです。

だからやっぱり「忘れない」というのが大事なんです。それで学習会の最初にこうやって皆さんに、「あの日あの時」どうだったということを思い出してもらうようにしているんですね。

分かち合い

「分かち合い」の経済学

皆さんに二冊の本を紹介したいと思います。一冊は、神野直彦さんの『「分かち合い」の経済学』（岩波新書）です。

神野直彦さんは財政学者で、いま国の地方財政審議会の会長をやっておられます。ぜひ皆さんに読んでいただきたいのです。

昨年の漢字、皆さん覚えていますね。「絆」でした。だけど漢字一字でなければ僕は絶対に、「分かち合い」の方がいいと思うんですね。なぜか。神野さんの本を少しだけ読ませていただくとそのニュアンスが分かると思います。この本の中でスウェーデン語の「オムソーリ」を翻訳して、「分かち合い」と言っているんですね。

『オムソーリとは英訳すると「ソーシャル・サービス」となる。日本語でいう「社会福祉」よりも広い概念で、福祉サービスに医療サービス、教育サービスが加わる。賃金を除く生活条件を補償する政策一般を指す「社会サービス」を表しているということができる。

この広く社会サービスを指すオムソーリという言葉の原義、つまり本来もっていた意味は、「悲しみの分かち合い」という意味である。オムソーリを紹介してくれたストックホルム大学の訓覇（くるべ）研究員に、教育も「悲しみの分かち合い」と考えるのかと問うと、即座に「当然のこと」という答えが返ってきた。

福祉の「福」は「しあわせ」の意味であり、「祉」も「神からさずかる幸福」という意味である。つまり福祉とは幸福という意味だということができる。

当然のことながら、悲しみを分かち合えば、悲しみに暮れている人は悲しみを癒され、幸福になる。しかも、悲しみを分かち合った人も幸福になる。というのも、人間は他者にとって、自分の存在が必要不可欠な存在だと実感できた時に、生きがいを感じ、幸福を実感できるからである。』

いい話でしょう。つまりオムソーリって言うのは、「分かち合い」、社会サービスなんですね。だけどその原点は「悲しみの分かち合い」なんです。喜びとか、財産を分かち合うのは皆さん喜んでやりますけど、「悲しみの分かち合い」から出発しないと、社会サービスは生まれないんだ。助け合う社会は生まれないんだということを言っている。神野さんは、この経済学の本で「悲しみの分かち合い」をベースにして、日本の経済のあり方、社会のあり方を考え直すべきではないかと言っているんですね。まあ詳しくは本読んでください。本当にいい本だと思います。

最近の新聞に、首都圏直下型地震４年以内に70％の可能性で起きると書かれています。平均寿命も延びているし、多分ここにいる皆さんも、もう一回大きな地震を経験するかも知れないと思っていたほうがいい。３月11日の大震災の教訓をきちんと憶えておくことが大事です。そのときわれわれを含めて、もう一度この「分かち合い」が試されるわけです。

「ヒューマン」

もう一冊は『ヒューマン　なぜヒトは人間になれたのか』（角川書店）、ＮＨＫで日曜日の夜、ＮＨＫスペシャル取材班時々やっています。だから番組を見ていただければいいんです。

このヒューマンは、人間らしいものの考え方、人間性がどこから生まれたかということを考古学、進化論や心理学やいろんな研究の成果を題材に追求しています。非常に興味深いことをいくつか言っています。

第一回を見た後、みなさんにお配りした原稿、『「終章３・11以降の持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）の課題（朝岡幸彦）』を書きましたので、ちょっとだけ反映されているんです。どこかというと、３ページの真ん中より下、「沈黙する春」と自然災害の、「しかしながら」で始まっている段落。下から７行目です。読ませてください。

『しかしながら、東日本大震災は「沈黙する春」を生み出した人の開発行為以外にも、原発事故を引き起こす直接の原因となった巨大な自然災害（地震と津波）という自然のもう一つの顔（厳しい自然）を見せつけている。石弘行は、過去20万年の環境史を踏まえて「これだけの地球環境の激変をもたらした原因」の一つとして、人間の開発行為や自然資源の収奪と並んで「火山噴火」を取り上げている。とりわけ、火山噴火が気候に与える影響について、ミファイル・ブディゴは１８８０～１９６０年の間の北半球の平均気温が直達日照量の減少が火山噴火と一致することを発見し、「日照量が長期にわたって１％減少すると気温は５度下がり、日照量が１・６％減少すると、極の氷冠が張り出だしてきて急激な寒冷化が起きる」と考えたことを紹介している。また、サントリーニ火山の噴火（紀元前１４５０年頃）にともなう津波でミノア文明等が消滅したことにも言及している。こうした大規模な火山活動が地球環境の激変をもたらしたことで、人類の進化に大きな影響を与えたとするトバ・カタストロフ理論（約７万５０００年前のスマトラ島のトバ火山の噴火にともなう寒冷化が人類の急激な人口減少をもたらした）もよく知られている。確かに、カンブリア紀以降（約５億４５００万年前）、少なくとも５回の大絶滅と呼ばれる生物進化のボトルネックが確認されており、そのいずれも人類以外の要因によるもの（隕石衝突やマントル・ブリューム等）であった。つまり、地球環境は人間の開発行為や自然資源の収奪をはるかに凌駕する規模で、ある種の「破壊」を経験してきたのである。人は地球環境の中に生物圏とは異なる「人間圏」を生み出したことによって自然を手なづけ、自然を破壊してきたと考えられる一方で、文明を圧倒する自然の猛威とどう向き合うべきなのかも、環境教育・ＥＳＤの課題として実感せざるを得ないのである。』

よくわからないところもあるかもしれないけれども、ひとつだけ、トバ・カタストロフ理論。これは、インドネシア、スマトラ島にあるトバ火山が７万５０００年前に猛烈な噴火を起こし、気候の寒冷化が急激に進行して、人類は絶滅寸前になった。

われわれの祖先は20万～25万年前に生まれた、現存するたった一種類のホモ・サピエンスというヒトなんです。このホモ・サピエンスは、だいたい東アフリカの湿地帯で生まれたといわれています。家族といっても、数十人（ＤＮＡ上は数千人規模）ですけれど、一つの家族（一族）から、われわれ人類が生まれたことになっているんです。これ名前分かっているんですよ。お父さんとお母さんの名前。どなたか分かりますか。（参加者「アダムとイブ」）

そうなんです。アダムとイブと言うんです。だから名前はアダムスファミリー。

ミトコンドリア・イブという仮説があります。われわれの細胞の中にあるミトコンドリアＤＮＡは特別で、母親からだけ子どもに伝わり、父親のＤＮＡと交雑しない。だから変異率を計算すると祖先をたどることができるんです。皆さんの髪の毛一本から、皆さんの祖先は類推できるんですね。だか

ら皆さん同士の中でもどれくらい前の親戚かと言うのが分かるはずなんです。

これらの研究によって7万5千年前には、東アフリカにいたわれわれの祖先はまだアフリカを出ていません。それがこのトバ・カタストロフを、推計によると、本当にわずかでしたが乗り越えたんです。考古学の成果で、黒曜石がどの程度、どの範囲で同じものが使われているのかを類推すると、いろんなグループがいたんだけれども、あるグループを中心にその周辺のグループは生き残った。それ以外のグループは生き残らなかった。その生き残ったグループは、特異な、他ではやらないことをやったんです。それが「分かち合い」だったんです。つまり家族同士、親戚同士で分かち合うのはどんな動物でもやるんです。われわれの祖先は知らないグループや知らない人とも「分かち合う」ことができたのではないか。これが実は生き残りに非常に有効な方法であって、今に、われわれにつながる大きな英知だった。こういう風にこの本にも書いてあるし番組の中で考古学者たちが言っているんです。「分かち合う」ことができるというのはわれわれ人間の特性だと言うんです。これからのまちづくり、われわれの生き方は、この「分かち合い」というのをもう一つのキーワードにして考えていったらどうだろうと考えています。

沈黙する春

パワーポイント　「放射線と自然体験を考える会」

この団体（日本ネイチャーゲーム協会）は、おそらく日本最大の自然体験活動団体だと思います。会員が一万人くらいいて、主に東日本の、子どもたちに屋外で自然体験をさせている指導者たちの集まりです。

私はそこに招かれて、「放射線と自然体験を考える会」の講師をさせていただきました。

屋外で落ち葉に触ったり、泥んこ遊びしていいの。ちょっと躊躇しますよね。でも彼らにとっては、これで食っている人は限られていますけど、自分たちがやっていることの正当性が脅かされる。

この写真の真ん中を見てください。「はかるくん」の絵です。日本のメーカーの製品です。数値は4・327。これは僕があわてて撮った写真です。だんだん上がって、8μSv（マイクロシーベルト）一時間当たり。これは福島県の飯舘村。計画的避難区域です。5月7日に行って、役場の前で測ったんです。芝生の一部に水を溜めるところがあって、そこに土が溜まって、濃縮して高く出る。これほど高いところはないまでも、やはり日本全国、放射能汚染問題にみんな敏感になっているし、敏感にならざるを得ない。またある程度敏感になったほうがいいんじゃな

いかなって私は思っているんですね。それで今日お配りした資料に放射能のことが書いてあるんです。

この話をさせていただきたいのは、私なりに東日本大震災で考えたことを、さきほど皆さんに見ていただいた文章にも書いてあるんです。（3ページ中ごろ）

「沈黙する春」、名文ではないんですけどちょっと読ませてくださいね。

『2011年5月7日、福島県飯舘村の春は、確かに「沈黙」していた。「山笑う」季節に里山の木々や草花は美しく、虫は蠢き、鳥はさえずり、けものたちの気配も感じる。』

これは「沈黙の春」というレイチェル・カーソンの世界と似ているけど違いますね。レイチェル・カーソンが言ったのは、草花や木々はこう生き生きしているように見えるけど動物たち、他の生物たちがいないっていうことを問題にしたんです。ところが飯舘村にはいるんですよ。牛なんか元気よすぎて、飼い主の言うこと聞かなくて、牛舎の外へ出て、外の草を食おうとしているんです。「おーい、やめろ、やめろ。」みたいな世界ですよ。

何が沈黙しているのかというと、その次ね。

春を、私たちは『しかし、人びとは家に引きこもり、田畑も手入れされていない。人のみが「沈黙」したどのように表現すればよいのだろうか。』

ということなんです。5月7日の時点では計画的避難区域に入れられていて、本当はもう避難が始まっていなきゃいけない時期だったんですね。一ヶ月以内に全村避難しろと、政府から指示されていました。子どもや若い人を除いてお年寄りなんかはまだ避難していない時期なんですよ。そういう人は「外に出るな」と言われているから、家の中に引きこもって生活しているんです。で、私はそれを「沈黙する春」と呼んだんです。

（パワーポイントをみながら）

これが飯舘村役場です。右から二番目が教育長さん、真ん中が私です。「なんか支援物資持って行きます」と言ったんです。水は要らない、食べ物も要らない。水は役場の前に山積み状態でした。僕らに、出されたのは中国製の水でしたよ。ノートパソコンが必要だって言うんですね。要するに一ヶ月以内に、数千人の村民が全部避難しなきゃならない。避難先はばらばらで、10箇所くらいになる。そうすると10箇所の避難施設に、地域ごととか、家族ごととかを含めて希望を聞いて、すり合わせが必要になる。ボランティアをしている、先輩の福島大学の先生に連絡とっていろいろ聞いたんです。福島大学の教員や学生たちは住民の希望調査を基に、個人データを入力するのに、端末が足りない。個人情報だから、限定された人にお願いするしかない。それで急いでパソコン4台買って持って行ったんです。とりあえずあの時はパソコンが一番必要だった。

まわり見てもね、ぜんぜん普段と変わらないでしょう。私、環境教育学者なのでもう少しだけ自然の話をさせてください

ね。レイチェル・カーソンが描いた「沈黙の春」と、似ているけどやっぱりかなり違うんです。見た目には何の不自然さもないふるさとを後にせざるを得ない飯舘村の人々が感じる、これ不条理以外の何ものでもないですね。なんていうのかな。決してね、原発を誘致した、建設した人たちは、だめだって言ってるんじゃないですよ。ただ立地しているところは原発にかかわる膨大な交付金もらっていますよね。飯舘村はもらってないんです。正確に言うとちょっぴりもらっている。何故か。福島県がもらっているからですよ。だけど飯舘村に直接入ってこないんですよね。事故が起こると自分たちはもう帰って来られない可能性がある。そういう不条理以外の何ものでもない。この不条理を「分かち合う」ことができるだろうか。ものすごく難しいんですね。でこれはね今も私どう考えていいかわからないんです。だけどたぶん分かち合わないといけないだろうと思っています。こういう状況です。

キツネにだまされる

人間が作り出した自然

２０１０年に、ＣＯＰ10（生物多様性条約第10回締約国会議）が開かれて「名古屋議定書」と「愛知ターゲット」（２０１０年以降の世界目標）を採択しました。生物多様性が大事なんだということです。これはいいことですけれども、よーく考えるんです。そうすると私たちが普段目にしている自然の多くは人間が作り出したものだということに気がつくはずです。

たとえば里山。里山は人間が作り出したものです。人間がかかわり続けなければ維持できない生態系です。要するに、人間が関わらなくても維持できる自然がこの日本のどこにあるのか。みなさん考えたことありますか。いわゆる原生林と、無人島とかそういうところは基本的にかかわらないんですけれども。そういうのって殆どないんですよ、日本には。世界的にも非常に限られている。ここに書いてあるようにね、「人が自然とかかわりあうということは何らかの形で自然に働きかけ自然を作り変えることを伴うのである。」その作り変えた結果が私たちの見ている里山であり自然なんだ。ここに気がつく必要がある。だから人は食料として、生活の手段として動植物を大きく作り変えてきた。

もっと身近なものについて考えると、たとえば家畜ね、私は農学部なので、ずっと調べていた北海道の酪農地帯のホルシュタインです。放っておいたらどうなるか。野良牛になりにくいと思います。病気になっちゃうんです。なぜかというと、ホルシュタインはすごい量のお乳を出すんですよ。あれ人間が絞っているから乳房炎起こさないんです。人間が絞らなくなったら子牛は飲みきれないです。そういう牛を作り出しているんです。

それから鶏。よく卵を産む鶏ね、あれ白色レグホンという、特定の種です。これの原種はイタリア産です。ところが困ったことに、この白色レグホンは、生き物として大事な機能を失っているんです。自分で卵を温められないんですよ、産みっぱなしなんです。だから人間がその卵を拾って温めて孵化させるんですよ。人間がいなくなったら絶滅するのは間違いないですね。穀物もそうです。農学部で扱っている動植物と

いうのはみんな人間が改良に改良を重ねて人間の手なしでは生きられないものが多いんです。

自然の向こう側にある社会を見る

だから、わたしたちは家畜を含めて、他の命を含めて自然を見るときに、自然そのものを見るんじゃなくて、その自然の向こうには過去から現在そして未来へとつながっている、あるいは世界中の人たちとつながっている、そういう人や社会があるんだということを見ておく必要がある。今われわれが自然をみて「ああいい自然だな」「ああ破壊されているんだ。残念だなあ」と思う場合はそれを生み出したり、維持したりした人たち、過去の人たち、そして現在の人たちのことを考えなきゃいけない。そしてこれを残すか残さないかというのは、未来の世代のことを考えなきゃいけない。つまり最後は、人や社会を見通す力を持たないと自然というのは評価できない。こういう風に私は思っているんですね。

キツネにだまされる能力

キツネにだまされる能力が今大事かなと思っているんです。なにしろ1965年以降ね、どうも日本人はキツネにだまされなくなったらしいんですよ。内山節（たかし）さんという哲学者が言っているんです。

※『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』
内山　節　（講談社現代新書）

僕もそういえば最近キツネにだまされたって話聞かないなと思っているんですね。

理由はいろいろ本に書いてありますが、やっぱり人と自然との関わりが薄れたからだまされなくなっているんですね。だから環境教育をやるときはもう一回キツネにだまされるようになったらどうでしょう。「キツネにとられた」「よかったね、教育成果でたよ」って。「キツネにだまされてね、外で一晩明かした」「それは最高だよ」という風にほめてやればいいんだよってなったらいいんじゃないかなって思います。

グローバリゼーション

震災により早まる過疎・高齢化

3月11日以降ね、何が変わったか、どういう影響を受けたかということを一生懸命考えてみたんですね。いろんなもの読んだり、人の話を聞いたりして気がついたことがいくつかあるんです。たしかに、さっきの学生の話じゃないけれど変わった部分と変わらない部分がある。この変わり方は、いままで進められてきたグローバリゼーションが、グーンと前に進んじゃった感じです。

私は新潟県の中越の出身なんです。生まれも育ちも中越。その後、10年ほど北海道にいまして、牛の育て方・飼い方をどう学ぶかという研究をしていたんです。牛そのものは飼ったことないですから、牛の飼い方を聞かないでくださいね。それで、中越地震（２００４年）から7年たち、そのあとすぐに中越沖地震（２００７年）が起こりました。そのときに、復興計画に基づいて復興している中越の中山間地域のフォローアップ調査にいくつか協力したんです。報告書も書いています。それで気がついたことがあるんです。中越の被災したところは、基本的にはほとんど過疎地域です。過疎・高齢化が進んでいる地域です。そういうところで大きな自然災害、地震とか、大雪も結構問題なんですけれども自然災害が起こるとどうなるか。すごい額の復興資金が入りましたよ。ハード的にはみんな直っていくんです。かえって立派になったぐらいです。それで復興していると思いますか。復興しているんですけれども人口は戻らないんです。要はこう落ちてきた人口が、がくんと落ちますね、復興でぐっと戻るかというとそんなことはありえない。復興で地域の構造が変わるわけじゃないから人口ががくんと落ちて、それがそのまま先に進むだけなんです。ただ深刻なのは地元の人が、「過疎・高齢化が10年早まった」と言ってる。本当は10年先に来るはずのものがすぐ来ちゃったんですよ。地震で。

考えてください。3月11日で津波や原発事故の被害を受けている地域は神戸みたいな地域ですか。神戸は沢山の人がなくなったけれども、もともと人がたくさん住んでいる地域です。だから復興力はあるんです。だけど今回の地域は過疎・高齢化しているところがほとんどです。おそらく元のようには復興しないですよ。復興しないからやめろと言っているわけじゃないですからね。つまり元には戻らないということを前提に新しいまちづくり村づくりをするように計画していかなくてはいけないと言っているんです。

グローバリゼーションがより一層進む

結局この東日本大震災の結果、何が一番変わったと言うと、グローバリゼーションがより一層進んだっていうことです。一つだけ例を挙げましょう。さきほどの原稿の（1ページ中ごろ）、「ポスト・グローバリゼーションとしてのＥＳＤ」のところで、少しだけ触れさせていただいているんです。

これは、京都大学の岡田知宏先生が言っていることです。たとえば、これ気仙沼だったかな。要するに大体同じなんですけれども、あのあたりは、水産加工の事業所が多いんです。だけれども復興支援は水産加工会社に優先的に行かないようになっている。なぜかというと一番求められているのは、サプライチェーン型企業。地震の後タイが洪水になって大変でした。日本の大企業、輸出型企業に部品を供給している会社がみんな被災したからです。だから東日本大震災のときも復興資金、事業資金を入れているけれども、優先的にやるのはサプライチェーン型で東京や関西の大企業、あるいは世界の大企業に部品を供給している会社を最優先で復興する。だから地元の水産加工の業者は後回しになってしまう。こういう事実です。これ自体私は問題だと思いますけど、これが今の世界を非常によく表している。過疎・高齢化しているところ

で巨大地震が起こって復興と言う場合に、グローバリゼーションが先に進む。だからＴＰＰが問題になるのもその延長上で考えていくと非常によく理解できるんです。

つまり世界が変わったんじゃなくって、世界が10年早く動き始めている、と見た方がいいんじゃないか。これは自治制度の見直しを含めて、当然そういうことが予想されると見られるわけです。問題は、まちづくりや学びを考えているときに、グローバリゼーションというものを意識していろんなこと考えていかなきゃならない。

ベルギーの経験

朝日新聞の記事を、私ウェブで見ているんですけれども、面白い記事がありました。ベルギーという国のお話です。今ベルギーは政権があるんです。だけど、５４０日ぐらい無政権状態だったんです。２年近く内閣がない状態。ベルギーの人はさぞ困っただろうと思うでしょう。予算は通らないし、暫定予算ばっかりですね。ところが、ぜんぜん困ってないという反応だったらしいんです。日本で政権が2年近くないと、大混乱生じそうです。でも困らない構造があるんです。それはＥＵだからです。ＥＵの通貨危機で、ないほうがいいなんて言われているけれど、一方でＥＵがあることによって国家の意味が変わったというのは確かなんです。国家がなくていいわけじゃないけど国家の権限のかなりの部分はＥＵが基準を決めて、代行できるようになっている。

それからもう一つ、これ大事ですよ。ＥＵの下では、自治体が強力な権限を持っているんです。つまり国の権限が上に吸い上げられるんじゃなくて、地方分権がより一層進んで、とりあえず自治体がしっかりしていれば、市民は、国民は生活できるんです、外交とか軍事とか、でかい話はＥＵがあればまぁ何とかなるわけでしょ。おそらく世界はそうなるんじゃないかなって私は見ているんです。日本も含めてその方向になっていくんじゃないかな。だから自治体が大事だっていう話なんです。

そういう意味で、グローバリゼーションが進んでいく中で、一つ一つの自治体や市民の動き方、学び方が大事だということです。

アンラーン「unlearn」

若い研究者は英語で授業・研究発表

そこで学習論を一つだけ、これも端的に分かりやすい例を示します。

わたしは、今大学の教員です。理系大学にいると英語で論文を書いたり、ディスカッションを平気でできないとすごく肩身の狭い思いするんですね。これ愚痴として聞いてください。私は英語が全くできないわけではないけど、そんなに気楽に英語で論文かけるほどの実力はないですからね。英語で授業やれと言われたらやりますよ。やりますけど、たった一つだけ学生に断っておかなきゃならないことがある。最初に、学生に「絶対に質問するな」言いっぱなしだけならいいけど、質問されて聞き取れなかったら恥ずかしいじゃないですか。向こうの方がうまいから、留学生とかね。でもそういう時代になりつつあります。

おそらく今の、中堅から若い研究者は英語で授業したり、英語で研究発表したり、海外の学会で、英語で発言する。私はアジアの大学と結構交流しているんだけど、もういやになるくらいみんな英語ですよ。本当に。中国人と韓国人と日本人がなんで英語で、会話しなきゃならないんだと思うくらい。通訳いらなくなるんです。そういう世界ができつつあるんです。これ企業だってそうです。僕はそれを悪いとは言わない。だから、識字教育も、読み書きというのは日本語だけじゃなくて、いずれね、英語でいろんなことを普通にやれるようになる。

あのブータンっていう国がありますね。ブータンはとっても面白い国なんです。あんまり知られてないけれど、ＧＮＨはともかく有名です。経済成長じゃなくて幸福度が重要だという。前の国王がおっしゃったことなんです。これはいいんですけれど、ブータンという国は小学校から英語で授業しているんですよ。かなり訛りはあるんですけれどね。朝の挨拶も先生が「good morning」と言うと、生徒が「good morning sir～」と変な抑揚つけて挨拶する。僕はテレビで見たんですけれど、英語を普通にやっている国なんです。

文化の多様性と学ぶことに疑問をもつことの意味

そのなかで私が問題にしたいのは、これ決して負け惜しみじゃなくて、学習論として社会教育の研究者がまじめに議論していることです。

われわれは学ぶことによって、あるいは一生懸命学べば学ぶほど「失っていくもの」があるということに気付いたらいいんじゃないでしょうか。みんな英語で考えて書くようになっていったら、英語以外の言語で書くことも、考えることなくなりますね。いちいち翻訳していたら時間かかってしょうがないから。でそうすると、日本だったら日本語、ブータンだったらゾンカ語。そういう独自の言語でずうっーと積み上げてきた、ものの考え方や文化が失われていくんじゃないでしょうか。アイルランドという国がありますね。もともと英語を使ってなかった。イギリスの隣だから早くに植民地化され、支配されて英語を普通に使っている。しかし、もともとはゲール語です。だからゲール語をみんなが使わなくなって困ったといって学校でゲール語を勉強しているんです。自分たちの文化、アイデンティティ、つまり多様性を失うんじゃないかってことです。

生物だって多様性が必要だし、文化だって多様性が必要です。今の社会がグローバリゼーションの中で進んでいくときに、それと違った社会のあり方、「あっもう行き詰った！もうこれはどうしようもない、ちゃぶ台をひっくり返さなきゃいけないか」というところまでいったときに、実は「あっこういう発想があったのか」っていうのは大事でしょう。その可能性を知る。そういうことを実は「unlearn（アンラーン）」っていう、ちょっと分かりにくい言葉で説明しているんです。

それは、私たちは学ぶことに疑問をもつことが大事。学びながら、学ぶという行為の中で「失っていくもの」をちゃんと意識して学ばなきゃならない。わかりにくいですよね。2倍学ばなきゃいけないってことなんです。量的にはね。つまり、学校でいい成績をとるだけじゃもうだめだっていう話なんですね。

放射能についての基本的知識や今後の対応

もう一つだけ皆さんに見ていただきたいものがあります。それは先ほどお話したように、数日前に農工大で多摩地区の環境審議会委員の合同の研修会をはじめてやりました。

沼津高専の渡辺敦雄先生に来ていただいて話をしてもらいました。この方はさっき話したように、福島第一原発の3号機と5号機とそれから浜岡原発の基本設計をしたんです。元東芝の社員で、当然プロです。そういう人の話を聞いて、本当に勉強になりました。

放射線の影響に関するデータの見方

多摩地区の放射線の影響に関するデータ。私の知り合いの人が課長をやっているある自治体のホームページです。被爆した線量が「100mSv以下で健康には影響ない」って書いてあるんです。だけど、なぜICRP（国際放射線防護委員会）は1mSvなのか。政府は100mSvというときがあるんで、それ受けているんですね。本当は1mSv以下にしなきゃいけないのに、なんで100mSvなんて書いちゃうのということを指摘しているんですね。

それから、1時間あたり東京でいうと0・23μSvと言われているんです。でこれを越えると除染をしなきゃいけない。濃縮した場所は、多摩地区にもあるかもしれません。そのときに0・23μSvが基準ですから、0・23μSv未満であれば問題ないと思われるんだけど、空間放射線量については、1日のうちに屋外で8時間、屋内に16時間滞在するという生活パターンを仮定している。それは本当に正しいのか。つまり花崗岩近傍やコンクリート構造には、カリウム40という放射線物質があるから一般的に高くなる。これは植物にも含まれている。放射線の検査から、通常マンションなどは木造住宅の1・5倍の被爆量がある。この先生は、東芝の社員だったときに、1日12時間、鉄筋コンクリートのオフィスのなかで働いていた。コンクリートの中で働いているほうが木造の中あるいは屋外よりも被爆量が高いが、そういうことを無視して基準を決めている。

文科省の出している放射能教育、改訂して出しているんですけれども、自然放射線量は、西日本が東日本より2～3割基本的に高い。何故かというと西日本のほうが、花崗岩が多いからです。だから、もともと東日本のほうが低いんです。確かに日本の自然放射線量は、年間1・2mSvですけれども、ちょっと西日本は高めに出るんです。そういうことをちゃんと考えないで0・23μSvってやっているでしょう。

放射能に対してどう対応するか

その中で、これは多摩の例ですけど、多摩地区の市民として、なにをすべきか。

1. 1mSvの基準を守ること。
2. なぜ放射線は体に影響があるのか学ぶこと。こどもの影響が高い。これもベクレルやシーベルトに換算するときに、性別や年齢や、いろんなものによって違ってくるわけですから、それを考えなきゃいけない。こどもと大人の基準を

分けたほうがいい。

3. 放射線量をしっかり計測する。これは、そろそろ第二段階に入っている。第一段階は市役所が市民に言われて必要なところを計測する、あるいは業者に委託して計測して公開する段階。第二段階というのは、市民自身に測ってもらうこと。必要だと思うところを測ってもらう。そこでそのデータを共有する。そのためにはできれば行政が同じ機種の放射線測定器をそろえて、それを市民に貸し出したり、あるいはグループに委託して測ってもらう。そのデータをちゃんと集計するっていうことをやる段階にきている。つまり一般論で高いとか低いとかじゃなくて、生活空間の中でどれくらいの放射線量が出るかを測ってみんなで共有する。この前提には、たぶんそんな異常値は出ないだろう。だから測っても、みんながパニックになるような数値にならないって言う前提があるんです。私は今府中の環境審議会の会長やっているんですけども、ちなみに府中市は44台放射線の測定器を持っていて、市民に貸し出し始めています。

4. 測定器の選択。実はこれが結構大事だと思っています。安い測定器は誤差が大きいので、やっぱり十数万円の測定器で統一した方がいいんです。同じ機種じゃないとばらつきが出ちゃうのでね、ちなみに文科省が学校に貸し出している機械が通称「はかるくん」です。測定器を行政がそろえて市民に測ってもらいその代わりに市民からデータをもらう。そして時々皆で学習会をする。継続的に調査していかなきゃならないですからね。そういう段階になっている。

5. 汚染者負担原則を貫くこと。

6. 給食の暫定基準値。これは武蔵野市の邑上市長にも聞いてほしいんです。実は1キロあたり５００ベクレルという基準が国から出されていますけども、松本市はチェルノブイリ原発事故の汚染地のウクライナの基準である1キロ当たり40ベクレルを採用しているんです。そう宣言してやっている。これはできない数字では決してない。皆さんこの朝日新聞（18都県汚染マップ）の記事を読みやすいように引用しましたけど、これは文科省が公開しているものです。それで、大体このあたりがどのくらいの汚染度かわかります。そうすると、ここでこれをやっても大丈夫だなっていう想像がつくんです。だから地産地消も含めて、決して打撃を受ける数字ではないので、おそらく40ベクレルにしても大丈夫だという判断があったと思うんです。こういう自治体もあるんだということですね。

いずれにしても、こういう状況の中で我々が、いろんなまちづくりを考えざるを得ないときに来ているんだっていうことです。

コミュニティ評価委員会の報告から

お配りした資料「今後の評価に向けて」があります。先日市長さんに手渡された、「第三期武蔵野市コミュニティ評価委員会」報告書の一部です。これは武蔵野市に限らず、まちづくりを進めていく上で、どうしても考えなければいけないものが入っているので、コピーしていただきました。コミュニティ評価を行うにあたってどういうこと考えたほうがよいかという話です。ちょっと読ませてください。

『本市のコミュニティ評価として3回目に当たる今回の評価は、これまでの評価とは異なる条件のもとで行わざるをえなかった。それは、コミュニティセンターへの指定管理者制度の導入にともなって、各コミュニティ協議会が指定管理者としても評価されるということである。

地方自治法の改正（平成15年6月）によって制度化された指定管理者制度は、平成17年4月から本市の各コミュニティセンターに導入されている。この制度は「（引用文省略）」を目的とするものである。とはいえ、コミュニティづくりと館の管理・運営に加えて、基本協定及び年度協定によって義務付けられた計画書・報告書の作成と管理費用等に関する取り決め、さらにモニタリング調査の実施は、指定管理者となるコミュニティ協議会にこれまでにない負担を強いるものでもある。こうした状況のもとで本市が「コミュニティセンターは、その施設設置目的を考慮すると、管理運営を行う団体を特定すべき施設であるため、非公募で候補者を選定します（指定期間は5年）」としていることは、評価において重要な要素である。また、コミュニティセンターへの指定管理者制度の導入を規定するコミュニティ条例第9条3項にも、「指定管理者に指定された公共的団体は、市民が自らの意思で参加し、自ら企画を立て、自ら運営するという自主三原則に基づき、コミュニティセンターを活動拠点としてコミュニティづくりを行う」と明記されている。

つまり、他の「公の施設」の指定管理者とは異なり、コミュニティづくりの主体としてのコミュニティ協議会の役割が積極的に評価される可能性がある。今回の評価は、「指定管理者」としての評価とともに「コミュニティづくりの主体」としての評価を同時に行うものとならざるをえないものであった。これは評価の対象となる目標の立て方において、ダブル・スタンダードを求めるものとなる。指定管理者としての評価には指定期間（5年）で達成すべき目標が明記されているのに対して、コミュニティづくりの主体としての評価には理想（地方自治の本旨）に向かって努力を惜しまない姿勢そ

のものが目標となるからである。

したがって、コミュニティづくりの主体としてのコミュニティ協議会の評価は自己評価を基本とし、そこに見出される課題解決の方向性を第三者評価として提示することで、住民主体のコミュニティづくりを支援するものとなった。まさに「コミュニティづくりは、市民が自己の責任において行動し、互いの立場を尊重しながら自発的に交流することを通して、開かれたネットワークをつくりあげていく」というコミュニティ条例の基本理念を具体化しようとするものである。「評価のための評価」とならないためにも、評価にともなう現行制度や政策の見直しに積極的に取り組むことが求められている』

いま武蔵野市のコミュニティセンターは、以前と同じようにコミュニティ協議会が管理運営しています。ところが指定管理者としてもそれを受託している。だからコミュニティ評価をする場合に、コミュニティ協議会は、地域の代表、地域の自治の担い手としていいコミュニティづくりをしていますという評価もしなければならないし、その一方で指定管理者として、契約どおりにやったかという評価もしなくてはいけない。これは、実はかなり矛盾する部分があるわけです。つまり自治というのは数字で測れない。武蔵野市の場合はかなり工夫されていてやられているんですけれども、でも指定管理者というのは契約のときに数値目標を挙げてそれなりの目標を達成したかどうか、改善されたかどうか見られるというのは避けられない。この矛盾をなんとか調整して評価しないと、たとえば指定管理者としては契約を達成してないからやめようとなったりしませんかという問題がでてくるんです。こういう選択肢は武蔵野市の場合はないだろう、あくまでもコミュニティ協議会を育てて地域の自治の拠点にしていくという以上ね。指定管理者制度をどう位置づけるかということを、これからまじめに考えておいた方がいいですといっているんです。

到達しない目標

…それに向かって努力すること自体が大事な目標

構成的理念と統制的理念

私の原稿の4ページをご覧ください。真ん中ぐらいです。「啓蒙されつつある時代」と統制的理念というタイトルがついているんですが、これは、エマニュエル・カントという哲学者が言っていることを、ちょっと言い換えたんです。

カントは目標の立て方には、構成的理念と統制的理念の二つがあると言っているんです。一つは構成的理念。具体的に到達できるもの、目標を設定していついつまでにこれを到達しましょうとやることです。行政計画の基本はそうですね。5年計画、10年計画と、それまでに目標を決めて、数値化できるものは数値化してやる。これは目標を達成するためには、手段を選ばないという考え方にもつながるものです。

もう一つは統制的理念。それに向かって努力すること自体が大事な目標であるということ。つまり到達しないのは分かっている。到達しない目標って何でしょう。いっぱいありま

すよ。平和の実現。これは努力をし続けなきゃいけないでしょ。平和だなあと思ったらね、どっかでまた戦争が始まる。いつも意識していかなきゃならない。それから教育でいうと人格の完成ですよ。教育基本法にものっていますね。人格の完成を目指す。みなさん人格完成したら、神様仏様ばっかりになっちゃう。それはないんですよ。人格は完成しないけど目指すことに意味があるんです。そういう目標の立て方。民主主義そのものもそうなんです。これは目標を実現するためには、手段そのものを吟味しなければならないという考え方につながるものです。

まちづくりもそうじゃないですか。市長さんをはじめいくら役所ががんばってもうこれで完成なんてありえないんで、むしろ市民が、こういうまちづくりをしようという議論をどんどんしていくことによって実はまちはよくなっていくんだ、こう考えたほうがいい。まさにこれは統制的理念の世界じゃないでしょうかという話です。これがさっき読ませていただいたコミュニティの評価とかかわっていて、統制的理念の部分が評価できないんです、簡単には。数値化もできないし。雰囲気は分かりますよ。「あ、ここのまちづくりはすごい」とか「この町内はすごい」とかいうのは分かるんですけど。でも評価するとなると非常に表現が主観的になってしまって難しいんですね。でもそれをやらなきゃいけないし、やることに意味がある。

公益を誰がはかるか

一つ例を申し上げます。それはＮＰＯ法と呼ばれている、特定非営利活動促進法という法律についてです。ＮＰＯ法ができたのは10数年前（１９９８年）ですけれども、ＮＰＯ法にとって一番重要な理念は、「公益」という概念なんです。公の利益ですね。「公益」という概念をどういうふうに位置づけるかものすごく論争になったようです。そのときに、条文のどこに「公益」という言葉を出すかということを工夫したんです。ポイントは「公益」を誰がはかるかです。だって、これは公益的活動かどうか決めなきゃいけないじゃないですか。誰がはかればいいんですか。皆さんだったらどうしますか。朝岡先生に頼もうって言ってくれるのは嬉しいんですけれども困っちゃうんですよ。私にとって利益になるものが「公益」で、利益にならないことは「公益」じゃないとう危険性がありますよね。じゃあ市役所でしょ。武蔵野市役所。まあ妙案ですね。だけど市役所にとって利益になることが「公益」かもしれないけれど、利益にならない、たとえば施策と違う「公益」があるかもしれませんね。

それで、結論は目からうろこです。実は「公益をはかるのは市民だ」。じゃあどうやって市民がはかるか。それはみんなが「私が思う公益はこれです」って宣言して、活動することが大切なんだ。当然Ａさんがいう公益とＢさんがいう公益は矛盾する場合がある。矛盾していいんだ。矛盾してもみんなが「公益」を考えて、「公益」を主張することによって社会全体の公益性が高まる。今の世界はどうですか。市場原理というのは公益じゃないんですよ。市場原理というのは、どれだけ儲かるかという話でしょ。だからグローバリゼーション、最後はそこにいっちゃうんです。だから格差が広がるわ

けでね。**分かち合いの精神を定着させる**

もう一回戻ります。私たちは、「分かち合い」というものをもう一度受け止めてまちづくりを進めたほうがいい。でもどうやって分かち合えばいいかっていうのは難しいんですよ。難しいから誰かに決めてもらおうと思っちゃいけないんですね。みんなが分かち合うというのはこういうことじゃないか、というふうに考えて、地域のなかで日本中で世界中で、いろんなものを分かち合う工夫をして活動していくことが、実は分かち合いの精神を定着させ、そして支えあい、地域の絆を深めることになるんだ。こういう風にね、考えるんですね。まぁ当たり前の結論で申し訳ないですけれどもぜひ、このことを頭において活動していただければと思います。

「わかるとかわる」の話をしませんでしたね。明日しましょう。それじゃこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。

邑上市長が講座に参加されました

～グループディスカッション～

質疑応答

質問

さきほど、アンラーンという言葉がございました。私どもは小学校以来というか、学校からいろんなものの学んできたわけですけれども、学び直さなくてはいけないっていうご指摘がございました。もう一つの学び方があるって言う話でございましたが、私どもは学びの仕方として学び直さなければいけないという点についてお話いただきたいと思います。

朝岡先生：

「unlearn（アンラーン）」という概念は、私も研究していますが、非常に複雑な概念です。私はあえて非常に端的に言っているんで、誤解を受ける可能性もあるんですけれど、こう考えてみると分かりやすいと思います。

今一番やりたいこと何って聞かれたら、キツネにどうすればだまされるのかということと、口伝です。これ教育学者としてとっても大事なことなんです。

口伝の歴史

口伝という世界が、ものの教え方にはあります。どちらかというと学校ができる前です。学校は日本ではそんなに古く

なく、せいぜい百年くらい前です。寺子屋は近代的な学校に入れないんです。明治のときに学制が作られて、小学校、中学校、高等学校、それから大学ができ、いまの学校教育制度が作られたわけです。

それ以前の教育を、もっとさかのぼってみると、われわれの祖先は20万年ぐらい前に生まれ、人類がサルと分かれたのは、６００万年から７００万年前です。それからどんどん人間に進化していきました。そのプロセスで、いくつか大事なものを人間は手に入れています。大体２５０万年前から３００万年くらい前に火を手に入れました。人間は20万年前から言葉を持ち、1万年前には農耕牧畜を始め、定住を始めます。そして6千年前に文字を持ちます。人は何らかの形で教育していたはずですが、そのときの基本的な教育のありかたが口伝じゃないかと言われているんです。

口伝

それは師匠と弟子の関係です。たとえば、今も落語の教え方は原則、口伝だそうです。さすがに時代は変わりまして師匠のＤＶＤやＣＤ聞いて事前に予習する。師匠がそれを見とけと言うそうです。でも基本は師匠と弟子が相対で、師匠がやって見せて、さぁやれっていう。それを繰り返しながら、落語のネタを覚えていく。こういうのを口伝って言うんです。

これは学校に多い、一斉授業の方式という、たくさんの児童や生徒や学生たちを前に、お話しするのとぜんぜんやり方が違う。むしろ一対一が基本なんです。だから教え方としては乱暴な部分もあるし洗練もされていないけれども、なんていうかな、一対一だからこそ、向かい合うからこそ伝わるものがあるんです。芸能の世界、お祭り、武道もそうです。

こういう世界に注目したときに、直接相対する姿勢でなければ伝わらないものが伝わるわけですから、優れたものが生まれる可能性があります。

つまり、学校のやり方では教えられないもの、学べないものを学ぶ方法があるんじゃないかということが一つのポイントなんですね。これはグローバリゼーションとはぜんぜん違う世界です。だから口伝のような学びの世界を持っておくと、もっとわれわれはいろんなことを豊かに学ぶことができるし、なにより大事なのは、これには工夫が求められるということです。学ぶ側も教える側も、マニュアル通りにいかないんです。工夫する心が、新しい学びと非常に深くかかわっていると考えられるということですね。ようやく教育学者が分かったんです。学校で一生懸命教えればいいというもんじゃないということ。それとは違う学び方、それを越えた学び方をもう少しきちんとやっていく必要があるということに気づいたっていう段階だっていうことです。

第二回　2月10日

「わかる」は「かわる」

皆さんおはようございます。昨日の皆さんの感想を拝見しました。大変もったいない評価をいただきました。

今回の講座の表題「わかる」は「かわる」についての話をしろと言われて、展開としては、やりにくいのです。いつもは、落ちのつもりで、最後に言うもので、いきなり「わかる」は「かわる」というふうにタイトルをつけられてしまうとですね、いつもと違ってやりにくいのです。

これは私が20数年前、北海道の小さな町の学習会で、ある女性から聞いたお話です。

これは「どうしたらその人は『わかった』ってわかるか」と聞くのです。「わ」と「か」を入れ替えろというのです。その人が本当に学んだかどうか、わかったかどうかは、その人が言っていることや、やっていることが変わったかどうかで判断するしかないのです。昨日の私の話よりよっぽどストンと落ちるはずです。

私は教育学者だから余計そうなのですが、子どもや周りの人たち市民に対しても、もっと学ぶべきです、勉強しろと言います。学ぶ前に何の為に学ぶのかというのがとっても大事な問題なのですが、一方で目的と同時にその人が本当にわかったかどうかを評価するということが、とっても大きな問題なのです。これは学習評価とか教育評価とかといわれるものなのです。

大抵の人は私の授業を聞いてわかったといいます。私の研究室はだいたい20人ぐらいの学生がいます。そこに東大で社会教育をやっているひとりの学生が、僕のゼミによく来るのです。彼は話したあと、頻繁に「何々何々は何々です。ね、わかりました？」と聞くんですよ。正直言ってね、ぼくもわかんない。わかんないけど、ここでわからないと言うと先に進まないので「うーん」っていう。だからそのように考えますとね。人というのは向き合うとね、わかった気になるんです。またそのように反応したくなるんです。だけど問題はあとになって、それがちゃんと思い出せるかどうか、そこが大事です。「わかる」というのは変わったかどうかで評価するべきだ。だから、みなさん昨日の話を聞いて変わりましたか。何か行動や発言の仕方が。これはね、三日は続く可能性があるんですよ。三日坊主にならなければよいのですが…。

「分かち合いが大事だとわかった。もう帰る道々いろいろな人と握手してもらいたくなった、気持ちが非常によかった」だけどこれが持続するかどうか、つまり自分の行動や物の考え方のなかで、ちゃんと位置づけて、自分の発言や行動に変

化を与えるかどうかが、実は大事です。これは本当に最後にぽろっと言うからうまくいく。最初にいきなりこれを解説するというのは、初めてなんですけど、とにかくそういうことなのです。

「unlearnってなんだろう」

昨日もうひとつ、かなり聞かれたのはこの「unlearn」なんですね。少しだけ補足させていただきますと、僕はunlearnを「口伝」で説明しましたが、わかったようで、わからないでしょう。unlearnはアメリカやヨーロッパでよく使われています。キーワードを出します。それは〈ローカルな知〉なんです。また何か変なのが出てきたなと思いますよね。では、これでどうですか。「地元学」、だんだん身近な言葉になってきますね。この流れの中で、議論されています。〈ローカルな知〉のローカルというのは、地方的、地域的という意味がありますよね。これと反対なのがグローバルです。昨日グローバリゼーションの話をしましたよね。対極にあるのが実はローカリズムとかローカリゼーションと呼ぶものです。この〈ローカルな知〉というのは、地球がひとつになっていくことによって、失われるもののひとつだということです。

ローカルな知（自然と人間のバランス）

よく引き合いに出されるのは東北の山の猟師さんたち、「マタギ」の世界です。マタギの世界は今はほとんどないわけですよね。獣害ってわかりますか。だんだん過疎・高齢化していくと、山もそうですし、田んぼ、畑も手入れができなくなってきますよね。そうすると、熊・猿・鹿・猪がどんどん縄張りを拡大して荒らしてしまうわけですよ。荒らすのも困るけれど、危害を加えられるのはもっと困りますよね。これを食い止めるひとつの方法はハンターの養成だということになっているのです。別に、鉄砲を撃つだけがハンターではないですね。例えば猪であれば、「箱わな」があります。わなで捕まえる方法もあるのですが、そのような猟師さんたちが激減しています。要するに高齢化しているのです。その人たちが、ちゃんと捕らないと、実は獣と人間というのは、バランスが取れないようになっているのです。

昨日も申し上げたと思うのですが、里山に典型的に見られるように、日本の自然の多くは、人間が生み出した自然なのです。生み出しっぱなしでなく、人間が積極的にかかわることによって、維持されている生態系なのです。人間が里山を放棄して、何十年、何百年、何千年経ったときに、その自然がなくなるわけではありません。最後は、極相林という森林に変わっていくだけなのですが、少なくともものこのようなイメージでいいのではないですかね。

武蔵野の里山というのは、平均して20～30年に一回、皆伐することになっているのです。皆伐というのは木をみんな切らなくてはいけない。だから太い木があってはいけない。とにかく、枝打ちや下草刈りとともに、そんな太い木がないので日が差すようになっている。ああいうのは人間がそれを維持するからできることです。

獣についてみても、人が狩猟することによってバランスを

とっているところがある。そのほかに農地の開拓のしかたや、木の植え方の変化とか、いろいろな要素が絡んでくることは確かなのです。このような智恵はいっぱいあるのですよ。例えば伝統農法、昔からの農業のやり方を知っている人は、今75歳以上の人だと言われています。高齢者でも75歳より若い人は知らないです。つまり高度経済成長期に就農した人は、古い農業のやり方を知らないということなのです。だからそのような〈ローカルな知〉はたくさんあるはずでね。これ大事にしていく必要があるのではないですか、ということなのです。

地元学

それをまとめて形にする地域づくり運動、地元学というのがあるのです。西の吉本、東の結城と有名な実践家がいるのです。結城さんは山形だったかな、吉本さんは水俣ですよ。

※吉本　哲郎　「地元学をはじめよう」（岩波ジュニア新書）

※結城登美雄　「地元からの出発」（農文協）

ただこれもね、これがそのままunlearnとは限らない、誤解しちゃいけないという話をします。例えば武蔵野の地元学ということにして「武蔵野学」を立てます。武蔵野のいろんな昔からあるものをみんな集めよう。そして「武蔵野学検定」とか始めたらどうなります。「武蔵野学検定」カッコいいじゃないですか。「ローカルな知」じゃないですか。実はそれ自体悪とは言わないけれども、そうなってしまうと、〈ローカルな知〉やunlearnにならない。それはもうきちんとした枠組みを誰かが作ってしまうからです。

unlearnという語感や、〈ローカルな知〉に入っているのは、生活している人、今そこで生きている人が、いつもそれを問い返す、作り直すという要素を入れていかないと〈ローカルな知〉にならないですよ。本当の意味での地元学にはならないということです。何か検定をやるということは、正しい知があって、その知に対して、ちゃんと覚えたかどうかを問われるようなら、学校の試験と一緒じゃないですか。そうなってくると実は、主体性を失ってしまうのですね。自分がその知の担い手、自分がいろいろと作り変えていくのだという意識や行動が無くなってしまう、だから、そういうのはちょっと違うよねという話なのです。

交換のやり方

交換の種類

私が「分かち合う」といったのは共助なんです。この前に自助がありますね。たしかに共助は公助や自助を否定するものではないのです。私の言っている「分かち合い」とは、どちらかというと、「助ける」という言葉が引っかかってしまうのかもしれませんね。

これは私が昨日みなさんにお配りしたプリントの4ページにカントの話が出てくるんですが、そこに柄谷行人さんの文献が引用されています。この人はいろいろ本を書かれているのですが、一番読みやすいと私が思うのは、岩波新書で『世界共和国へ』という本です。これは基本的には我々が生きている世界が、昨日も申し上げたグローバリゼーションですね、

いわゆる地球がひとつの市場に統合化されるということを、どのように考えるかということを問題にしているのです。そこにこのような図が出てくるのです。

交換する	
互　酬	再配分
X	商　品

　これは本に書いてあることなので、イメージで結構ですが、人がいろんなものを交換するということは、分かち合いもそうなのですが、昔から行われていたことなんです。交換のやり方には、基本的に三種類あります。互酬と再配分と商品交換、この三つの方法があります。

互報

　互酬というのは、例えば、家族、あるいは昔の共同体、今もムラへ行くとしているでしょう、おすそ分けです。

　新潟の中越では、ずいぶん大雪になっているのですが、ひとりで住んでいるお年寄りが、自分で雪下ろしをして、事故にあって亡くなるケースが今年新潟は多いといわれています。かつては村の若い人たちが、みんな総出でそれぞれの家の雪下ろしをして回っていたから、家がつぶれるということは、そうそうなかったのです。少なくともお年寄りがひとりで生活しているということ自体がなかったわけですね。そのときいちいちお金をもらったかというと、そのようなことはないのです。まさに互酬だったのです。それを共助という言い方もできますけれど、家族がいっしょに食事をしたり、誰かが食事を作ってあげるとき、いちいち「はい、今日の夕ご飯５００円」とかってやらないわけでしょう。つまり当たり前なんですね。そのような関係があることは確かなのです。ほとんどこのような世界がなくなっているのですけど、家族は少なくとも、この互酬的世界ですね。昔、ムラはみんなこれだったのですね。

再分配は国家だけができる

　再配分は国家だけができる行為なのです。これはセットになっていまして、略取・再配分なのです。国家というもののひとつの機能なのですけれど、国民から、国民が嫌がっているのに、無理やり持っていくのです。例えば国家は税金を取れますね。税金を取るなんてことは、国家にしか認められていないのです。その延長線上で、東京都や武蔵野市も認められているということなのです。税金を取ってどうするのですか。再配分するのです。だから、ある人からも、ない人からも、みんな取ってしまう。再配分するときに、再配分の仕方が問題になりますよね。社会政策もそうですし、福祉もそうですし、学校もそうですね。つまり、それでバランスを取ろうという考え方です。そのような機能を持っているのは国家しかないのです。

昨日の講座では神野直彦さんの「分かち合い」の話から入りましたよね。神野先生は国の地方財政審議会の会長をやっていて、責任ある立場なのです。だけど、神野さんが明言しているのは、消費税増税反対なのです。私も消費税増税反対です。では、増税反対かというと、反対ではない。税金を上げざるを得ないとすると、何がいいでしょう。基本的には消費税を増税するか、法人税・所得税を増税するか、この二つしかないのです。これはぜんぜん考え方が違うのです。効果も違います。神野さんは地方税調の会長としてというより、一人の財政学者として、消費税は上げるべきではない。その代わり法人税・所得税を上げる。これは実は再配分機能を期待しているからでしょう。

つまり消費税は、貧しい人からも、豊かな人からも、同じ額をほぼ取ってしまうのです。例えば日本では食品にも消費税がかかりますよね。食品にかかるということは、例えば極端に言うと、年収1億円の人と、年収1千万円の人と、年収２００万円の人がいたら、そんなに食費に違いがあるかということですよ。だから広く浅くです。1％上げれば、みんな1％。だけど、その負担感が1億円の人と2百万円の人とはぜんぜん違うわけでしょう。だから不平等を助長するので所得税や法人税のように、あれは累進性がありますから、1億円の人の税率はかなり高いはずです。

この20年間、いわゆる小泉改革以降、高額所得者の税率を下げてきたのです。昔、十何段階税率区分があったんですが、今は六段階くらいになっているのではないですか。それでも所得の低い人と高い人では、かなり税率の開きがあります。それをやれば、再配分機能になるじゃないですか。貧しい人に、困っている人により多くの再配分ができる可能性があるじゃないですか。たくさん持っている人からいっぱい取って、こういうのが略取・再配分、これが国家の仕事です。

商品交換と交換X（新しい関わり合いの提起）

もうひとつ商品交換。これは言うまでもなく市場取引です。三つあるのだけれども、柄谷さんは、もうひとつ新しい交換の仕方があるじゃないかと言うのです。いまさら、互酬というふうにもならないし、みんな元のムラに戻ろうというわけにもいかないです。

世界はガンガン商品に凝っています。これは競争とセットになります。だからいいものは残るし、悪いものは滅びていく。優勝劣敗の世界ですね。こういうのが主流になっている。このままではうまくいかなんじゃないでしょうか。だから自助・共助・公助という言い方と微妙に重なるように、微妙にずれるのですが、実は、みんな自助・共助・公助どれがいいとか、みんな組み合わせてという世界だけど、そもそも世界はどのようにつながりあっていくのかということについて、柄谷さんは、このような図を使って、歴史的に説明するのです。理論的に三つのやり方が歴史的にもあったし、これは考えられますね。これ以外の、もっと別のつながり方を柄谷さんは「アソシエーション」というのですけれど、何だかよくわからない。でも、今まで経験したことがない新しいかかわり合い方を考えなくてはいけない時代じゃないでしょうかと提起していると思っていただければいい。

新しい仕組み　地域通貨とワーカーズコープ

私が「分かち合い」といっているのは、そういうことなのです。だから、今まであったどれかでは多分なくて、何か新しい仕組みですね。例を挙げますと「地域通貨」です。地域通貨という仕組みの考え方は、アソシエーションに近いと思います。そもそも地域通貨は、お金ではないのです。お金の機能よりいろいろな機能があります。実は、お金（貨幣）には人と人がつながり合う機能があるんです。それが市場や商品の段階では、非常に歪曲されちゃうんですね。一番いい特徴をひとつだけ言うと、多くの地域貨幣は「貯められない」ことになっているのです。

例えばけやきコミセンは、「エト」という地域通貨を持っています。百万エトを貯めても、けやきコミセンは私のものにはならないわけですよ。地域通貨をあまり使わずに持っていると、減価してしまうのです。せっかく千エトを持っていたはずなのに1年経ったらそのうち10分の1がなくなります。ひどいのは半分になります。そう、1年経つと千ポイントたまったから使わなければと思うでしょう。だから地域通貨は使うためのツールなんですよ。

どうやって使うかというと、例えば、先ほど申し上げたように、新潟の雪の多い所で言えば、雪下ろしが手伝えます。その代わり、そこのおばあちゃんが作った漬け物とか作物、あるいは智恵、昔話を聞かせてもらえれば交換が成り立つでしょう。こうして交換していくことに意味があるのです。だから地域通貨は、経済学でいうと資本にならないんです。資本というのは蓄積するものですからね。資本に転化しない通貨なんですね。だからこのような地域通貨が実現しようとしているものは、もしかするとコミュニティなのかもしれません。いっしょに住んでいるということだけじゃないですよ。集団もサークルも含めてですけれども。コミュニティの結びつきをこれらとは違う次元で実現しようとしている可能性があるので、地域通貨の取り組みの延長線上にはもしかすると、新しいものがあると思います。

それからもうひとつは、私は最近てこ入れしているというか、係わりを持っているワーカーズコープという仕組みがあるんです。生協や農協と決定的な違いがあるんです。要するに働きたい人が組合に入って、出資をして、仕事をするんです。つまり働くことを目的にした協同組合なんです。ただ、まだ法律ができていないので、非常に不安定な部分もあるんですけれども、労働者協同組合とも呼ばれているんです。ワーカーズコープの仕組みなんかも、（3つの交換形態の）どれにも当てはまらないわけです。人に雇われない働き方ですからね。しかも、協同組合の原則を使いますからね。だからそういうものは、いくつもあるんです。

行き詰っている時は、自分で考えて、実行して行く

古いものでいうと、内橋克人さんが書いた『共生の大地』（岩波新書）という本があって、これ10年ぐらい前かな。あそこに書いてあることと、つながるものがあるんです。

いずれにしても申し上げたかったのは、今すでに存在する、あるいは主流になっている人のつながり方、社会のつながり方とは違うつながり方の模索が始まっていて、まだそれがこ

れだっていうのが、出ていないのだけれども、たぶんそういうものを求めていくということが〈ローカルな知〉や地元学ということです。まあいずれにしても、これで皆さんわかりましたか。ちょっとこれ反応悪いですね。つまり考えてほしいのです。今、社会が行き詰っているでしょう。行き詰っている時は、乱暴な主張をする人が強くなります。そういう時にこそ自分で考えて、まだこの手があるじゃないかという、アイデアを出して実行して行くということが実は求められていて、まさに今、学習が求められているというのは社会を変えるためなのですよ。自分たちが変わっていくために。そのように理解してもらえれば、少しは実感がわくかなと思うのですけれども。

昨日の振り返りと新たな質問などグループで出し合う

■ グループ発表

第1グループ

・私の自己紹介とした話をいたします。私は会社を退職して、地域に男の人たちが何かできる組織があったほうがいいなということで、NPOに参加して、さらにそこから分かれて、武蔵野にもNPOを独立して作りました。その団体の中で、会員の研修制度の担当をおおせつかりました。

・会員研修というのは、地域活動をするときに、どのように活動しなければならないか、私たちは何を考えて活動したらよいのだろうか、それを私どもが学びなおすということは何かとか。特にサラリーマンをずっとやっていた人たちが地域にポコッと入ってきたときに、それは従来の会社人間がそのまま入って活動しようとしても、とても難しいと思います。ではこの会に人が集まれば何かできるのか、人が来れば誰かが何かやってくれるのか。私たちはどうしていったらよいのだろうかと、それが研修の会のテーマであろうと思ったのですが、私が考えてやろうとしたのですが、残念ながら人が集まりませんで。

・それから智恵がうまく集められなくて、未だもって会員研修制度は実行できていないという状況です。核となる人が出てこないと駄目なのですが、核となる組織、核となる考え方、人材、これを私たちはどのように作れるのかということが問われていると思います。そこの智恵をいただければと思い参加しました。以上です。

第2グループ

・キツネにだまされる力という話を、もう少し詳しく知りたい。
・まだまだひとりひとりが新しい価値観を生み出せる可能性があるのではないか。
・協働の協と共生の共というのですか、二つのキョウの違いをもっと考えてみたいし、知りたい。
・新しいまちづくりの手がかりを何か得ることができるかと思い参加した。私もそうなのですが、コミセンに全く関わっていない方は、コミセンがまだ地域に溶け込んでいると感じていない。コミセンの可能性を探りたい。
・ひとりひとりのいろいろな思いをパッチワークのようにつなげていけたら良いのではないか。
・今日は政治的な話だと思って来た方もいらして、政治や憲法を変えるために市民ひとりひとりが出来ることがあるのではないかと。このような話だと思わなかったという方もいました。
・それぞれがテーマを持っていて、同じ事を思って参加したわけではなく、震災後でこの地域をどのようにするのかとか。うまく言えないのですがそのような感じを受けました。

第3グループ

・コミセンの方や、普段福祉のボランティアで活動されている方でも、このような勉強会になかなか足を運んでいただくことができない。
・普段から皆で勉強会をして共有できたらもっと良いのではないかということがあったのですが、そのような点からも地域のつながりを強くするためには、普段出てこないような方、敷居がちょっと高いと思っているような方が一緒に参加して、情報を共有することでもっと想いとか、防災の時とかに、一緒に助け合えるような、何か分かち合う方法がないのかということが、意見として出ました。
・個人的に口伝の機会というのが実際に減ってきているのではないかと思います。若い方とお年寄りがコミュニケーションを取る機会があまりないので、伝わらないです。このような情報も共有して、分かちあうことができてればいいなという感じでした。

第4グループ

・昨日お話いただいたカントの統制的理念は身近な事に捉われすぎないで、いいまちをつくるということに向かって努力していくことは素晴らしいと思う。また、アートの視点

でまちづくりをしていく上で、どのようにつながって、かかわりを持っていけば良いのかをお聞きしたい。
・まちづくりを協働として考えてゆく上でどのようなことが本当に大事なのか、何が一番もりあがるのか。
・南町で「ミーナ」という地域通貨をやっていることをお伺いして、それをどのように広めていくのか伺いたい。

第5グループ

・市の職員さんは今まで助け合いとか支えあいという言葉で言っていたけれど、分かち合いというのが非常に新しいキーワードだという感想がありました。
・忘れないということが非常に大事だと。考え続けるということが、忘れないということの意味だということですね。同時にそれは先ほどのカントのところですが、目指し続ける学びというのがやはり大切だろうという話が出ました。
・口伝というところと、先ほどの地元学という感覚なのですが、今、武蔵野市が災害時要援護対策事業をやっていますが、行政の考える制度と実際にそれを地域で受けて展開しているところで、微妙な境界線のようなところが出てきています。ここは非常に地元としては大事なのです。制度としてあるということで皆さん、安心感があるわけです。実際に起こった時にどれだけ役に立つのかということは別にして、災害時に安否確認してもらえるということが非常な安心感につながっています。この安心感がもう少し広がっていくために、3月11日、たくさんの方が住民の相手の方のところに安否確認に行かれて、そこで互いに気遣いあうということの大切さに気がついていくのですが、それをもっと周りの人に広く知らせていくための言葉というか、それをうまく伝えていく方法を私たちはまだ持っていない。そこをどのように作って行くか、そのことは、柄谷さんの言うXを見つけるということにも、つながっていくと思うのです。
・口伝が大事であるという事で、今私たちは親からいろいろ言われ、教えてもらって覚えてきたものがいっぱいあるのだけれど、自分の子どもにはそれを伝えてきたか。もっと若い世代になるともう幼稚園児はお稽古教室に、それから皆、なにか人に教えてもらうとかやってもらうというようになってしまったけれど、やはりこれは家庭の中からでも、口伝を再開していかなければならないかな。人任せにしないということが非常に大事ですし、そうやって変わっていかないと変わらないと変えられないというか、そこにつながって行くかな。やはりunlearnというのはまだ確実につかめていませんが、そのことが大事だということをここで確認できました。

朝岡先生

コミュニティセンターの活用

これは私が皆さんのお話を聞いて、勝手にメモしました。最後は武蔵野の特徴として、コミュニティセンターというのをどう活用するかということは、皆さん自身の問題として是

非お考えいただきたいと思っています。

その前に皆さんがいろいろな枠組みの中で、キーワードを出していただきました。これをどのようにまとめるのかというか、これはどこかひとつでいいような気がするのです。つまりこれを全部理解しないと、何もできないのではなく、これは全部つながっているのだから、うまくバランスを取りながらやらないといけないと考えないほうがいいのかもしれないですね。どこかひとつで良いような気がします。つまりここに出てきたキーワードというのは、結果として政治につながる場合があるわけですよね。とにかく何かひとつ糸口を見つけ出して、できることを確実にやっていくという積み重ねが必要だということははっきりしているのです。ここに皆さんが考えられたことをね、ひとつひとつ模索されることを前提にしてもう少しだけ解説させてください。

向き合う関係

古今伝授（一番古い口伝）

例えば日本で一番古い口伝といわれているのは、加藤周一さんが『日本文学史序説』に書いているのですが、「古今伝授（こきんでんじゅ）」だといわれています。実は古今和歌集という天皇が命じて作った和歌・短歌の撰集があります。そこに出てくる言い回しというのが非常に特殊な言い回しなのです。例えば私の専門は環境教育なので、自然に関する言葉が古今和歌集の中にもたくさん出てくるのです。けれどもそこに出てくる自然に関する言葉、鳥や花や風景は、歌を詠んだ貴族たちがまぢかに見て、感動して書いているわけではないのです。実は約束事があって、鳥というとこの鳥。花というとこの花。決まっているのです。約束事だらけなのです。例えば自然に関する言葉があるから日本人は昔から自然が好きだったと思うのは間違いで、あそこに表現された自然というのはきわめて定型化された、約束どおりのものなんです。問題はその約束をみなオープンにしていたかということです。実は「古今伝授」というのは、これは特定の家に代々、本当に一握りの人達に伝えられてきました。だからこれは古今和歌集の選者が特定の弟子を決めてその弟子にだけこっそり教えたもの。その弟子はまたその弟子にこっそり教える。誰にでもオープンにするものではなかった。これが実は口伝の始まりと言われています。なぜこのようなことをしたかといいますと、古今伝授を受けるとその世界での地位と財産を約束されることになるわけです。口伝というのはそのようにするのです。

禅宗問答・獅子舞

そこまで閉じた世界でないにしても、例えば禅宗という仏教の一派ですが、問答を傍で聞いていると、なにを言っているのかぜんぜん判らないのです。だけどあのような問答というものが成り立つのは、師匠と弟子が相対して問答するからですよ。このような伝え方があるのです。これも口伝というふうに言われています。いかにも言葉が介在するように思うけれども。

獅子舞だとか、踊りもそうですよ。そのようなものは口で伝えないでしょう。それはなにで伝えるかというと所作（し

ょさ）ですよ。口頭伝承、口伝の中には口頭伝承もあるけれども所作伝承というのがあるのです。獅子舞をどのように教わっているのだろうというのを研究して、東京都の檜原村というところへ行って、ずーっとビデオを撮るのです。ひとり実験台になってもらってね。ほとんど教えないですよ。「よしっ、やるよ」といきなりやるのです。何も教えないで、見よう見まねでやらせるのです。これは典型的な所作伝承。更にここから、非常に理解しにくいのですが、心意伝承というものもあります。向かい合って口で伝えたり、所作を教えたりするのです。その中に気持ち（精神）も教えるという段階がある。だからいろいろなものを含めて「口伝」。はっきりしているのは、師匠と弟子という関係であるのだけれど、向き合うのです。向き合った関係です。

教育

このような関係がじつは教育の中にはあるのです。これは古いやり方なので、今の学校にないかというと、厳密な意味では、ちょっと違います。学生に私がよく言うのは、これだけＩＴが発達して、インターネットが普及して、なぜわざわざ子どもたちを一つの空間に集めて、先生が教えるのか。自宅学習でいいじゃないの、なんで集まるのでしょうね。不思議ではありません？だって教えるのってだいたいパターンは決まっていますからね。下手な若い先生に教えてもらうよりは、予備校のように話のうまい、表現のうまい先生のビデオを見て、質問があれば質問できるでしょう。その方が良いのに、どうしてなんだろうと考えたことはありませんか。最後は、そこに生身の人間がいて、向かい合って、たとえ相手が多数であっても、すぐ反応してくれる。あるいはこちらの表情を読んでくれるということが前提にあるから、あのような学校の教室という空間が残っているのではないでしょうか。それが原点であって、古いやり方ではあるけれども、ここはどうも欠かせないのではないかと思います。

人は向き合うことよって進化してきた

進化論とか、進化の話を見ていると面白い話がいくつもあるのです。

人間には黒目と白目がありますね。チンパンジーとかゴリラとか犬とかはどうですか。例えば犬とか猫に白目はありますが、あっても非常に小さいです。だいたい茶色になっています。こんなに白目が大きいのは人間だけらしいのです。普通の動物は、白目が大きいと不利なのです。そもそも人間ほど表情が豊かな動物はいませんからね。表情が豊かで白目があるというのはすごくいい。なぜかというとこちらの考えや動きが読み取られてしまいます。誰を見ているのかどこを見ているのか分かってしまう場合があるのです。だから普通の動物はそのように進化しなかった。人間はある時からそのように進化してしまったのです。なぜかというと「私はあなたのことを見ていますよ」と分かるように合図したのです。表情もそうなのです。「敵意はありませんよ」「怒っていますよ」「悲しんでいますよ」相手に伝えるツールとして、目や表情は進化したと言われています。これは人間の特徴だと言われているのです。なにが言いたいかと言うと「向き合う」とい

うのはとっても人間らしい行為なのです。その代わりストレスも溜まるのです。よく面接試験で大学生たちは、就職活動になると相手の目を見て話しなさいというのを思い出すのです。そのとたんにゼミでも何でも学生が私の目を見るのです。そうすると私の目の方が泳いでしまいます。口とかあごを見ているほうがお互いに居心地がいい。だから向き合うというのは大変なのですがとっても大事です。どうも人は向き合うように進化してきたはずだということです。人間らしさというのは人と直に向き合って、言葉を交わしてもいいし、言葉を交わさなくてもいい、何かを伝え合おうとする習性があって、その中で困っていれば分かち合おう。うれしければこれも分かち合おう。そのように進化して来たのではないか。どうも人間が直接向き合うということが後退しているのではないかということなのです。

キツネにだまされる

キツネにだまされる力の話をもっと聞きたいというけれど、これはね容易にはできない。でもひとつだけね。「だまされる」という関係は向き合わなければ無いのです。いやそんなことは無い。オレオレ詐欺がある。でも電話口で、ちゃんと相手と交信しているではないですか、見てないだけで、これはね向き合うからだまされるのです。だから私たちは他の動物と向き合わなくなっているのです。もちろんペットになっている犬とか猫とか、他の動物と向き合っているかもしれない。だからそこに感情移入するのでしょう。感情移入してかけがえの無いパートナーになっていくわけで、まあ犬や猫は、人間のパートナーとして進化させられて来たからそれでいいのだけれども。

どちらかというと、私たちが近代化するというのは「向き合うな」というように言われてきた面があるのです。だからだまされないようにだまされないように、損をしないように損をしないように、ずーっと（気持ちのうえで）引いてくるのです。引けば引くほどだまされなくなる。得をするではないですか。どうもそのような関係で、結局私もそうなのですが、向き合ってしまうと、もうこれは嘘っぽいけれど騙されてもいいかなと思う瞬間があるのです。まあ１０００円ぐらいだったらいいかとかね。

隣近所とつながる

向き合うというのは、たいてい相手がいることなので、相手とつながっていくというのは、「ちょっと損をしても、ちょっと位だったらいいか」やはり人とつながりたいという潜在的欲求があるのですね。だからそれをどのように、もう一度回復するかというように考えていただければよいのです。要するに、今私たちは、人と向き合わなくなっている。もちろん向き合うためには、先ほ

ど自助・共助のところでお話できませんでしたが、個人情報保護法の問題があります。例えば、お互いに助け合いたいから、対象者の名簿をくださいといってもくれません。目的さえよければ、何でも認められるという話ではないのに似ていまして、自分でそのようなネットワークを作っていくしかないのです。いきなり行政がやるように網を掛けて、対象者全員にメールを送ったり、手紙を送ったり、電話して集めようというやり方は向き合っていないので、そのやり方はあまりお勧めできない。むしろ隣近所からまず考えるということです。

私も実は府中のマンションに住んでいます。私のマンションは、ゲーテッド・コミュニティのミニ版みたいなものなのです。ゲーテッド・コミュニティというのは日本語で言うと「要塞街」というのです。アメリカで発達して、外の世界からちょっと隔離されている。今はどこでもマンションに誰でも自由に入ることができないところが多いのですか、それをもう少しシステム化しているのです。私の家に入るには、最大5回、鍵を開けなければなりません。建物の敷地全体がフェンスで覆われています。敷地に入るために門の鍵を開けなければなりません。中庭を通って自分の建物の前に来る。前に来ると普通のマンションと同じように鍵を開けなければいけない。鍵がなかったら呼び出すしかない。さらに、自分の家（部屋）の前についたからといって、うっかりドアの鍵を開けてはいけない。アラームを鍵で解除する。ドアにはさらに、鍵が二つ付いています。これの手順を間違えると大変なのです。これが良いとはぜんぜん思っていませんが、そのような生活が現実には求められています。要するにマンションに住んでいる人は、向き合わないように作られているのです。でも、さすがに向き合わざるをえない世の中になってきました。高齢化しているしね。支えあわなければいけなくなってきた。どうすればいいのだろう。大きな問題ですね。

武蔵野市で新たに町内会がつくられている理由は

基本的に武蔵野市に町内会がないのは、なぜだか知っていますか。（町内会が）戦争に協力したという時代があるのです。だから戦後日本がＧＨＱに占領されたときに、戦争に協力した組織は全部一度解体されているのです。だから日本中、一度町内会がなくなるのです。なくなったけれど、やっぱり不便だといって、ぽちぽちと各地の町内会が復活し始めるのです。ところが、武蔵野市は復活させなかった珍しい地域なのです。だから、町内会の代わりにコミュニティ協議会が置かれたと見ていいのです、歴史的にはね。でも、今、ここでも町内会が必要だという話になって、作られ始めていますね。それはそれで非常に興味深いことなのです。

コミュニティセンターを実際に運営しているコミュニティ協議会と、町内会はどこが違うのか。このような問題は必ずつながってきますね。別に違いがあると言いたいわけではありません。コミセンがあるのに町内会を作っているということは、多分理由があるはずですからね。

人があつまらないのは

みなさんお分かりになるかもしれませんが、もうひとつ大

事なのは主体性という言葉がここには隠れているということなのです。

最初にお話したように、私たちは何を考えて地域で活動すればいいのかを考えようと思ったけれど、人が集まらないという話ですよね。そういうのをまとめていく核となる人はいた方がいいのですが、人を期待してはいけないわけです。ひとりひとりが核となるように工夫する必要がある。まあ、言うは易く行うは難しなのですが。

人が集まらないのは、集まらない人のニーズに合っていないからなのです。つまりその人にとって本当に切実な問題、本当にやらなくてはいけないと思っている問題であれば集まるはずなのです。あるいは、そういう人に働きかければちゃんと集まるはず。

だけどなんかこう、「なんかやってみない？」「世のため人のため」と言うように私が声をかけたら皆さん来ます？そうじゃないんですよ。つまり、まず自分が一番切実な問題を考えてみます。そうすると、一人では出来ないですよね。そうすると同じ課題を抱えている人がいるはずです。そういう人を探すのです。そうするとじゃあお任せね、ではなくて、二人で協力して何かやれないか、三人いたらもっといいじゃないか。

でも、このような問題が例えばね、非常に抽象的な言い方で申し訳ないのですが、特定の人が困っている問題を何人かで共有できれば、そのことについては一緒に考えて分担して、行動出来ますよね。誰がリーダーになってもいいのです。

リーダーは誰でもいい会社

たとえば、メガネ21という眼鏡屋さんがあります。広島に本社がある株式会社なのですがとっても変わった会社なのです。村上龍の「カンブリア宮殿」で紹介されて、私のメガネは実はわざわざそこ（赤羽）まで行って買ってきたのです。

リーダーの話しでいうと、ものすごく面白いやり方をしています。社長さんは交代制です。一応会社なのでいないと困るのでいます。だけれど社長として本来の業務はしていませんね。1年だか2年だかでローテーションで回っているのです。社長の給料は、前の年のいちばん年俸の高い人に合わせる原則。

会社のもうひとつの特徴は、いわゆる内部留保を作らないということです。だからみんな配ってしまう。内部留保がないと何か事業を新しくやるとき困るでしょう。実は困らないのです。社債を社員向けに発行しているのです。これは利率がいいので、例えば10％の社債だったら皆さん買うでしょう。これは先ほど言ったワーカーズコープにそっくりなのです。ワーカーズコープも働くために最初5万円出すんですよ。出資だから、5万円は返ってくるんですけれど、これがないとお金が回らない。それと似たようなこと、だから、リーダーは誰でもいい可能性があるんです。ある約束事さえすれば、目的さえはっきりしていれば誰でもいいんです。

それに関連して、一人暮らしの自分の母親をなんとかしなければいけないと思ったら、そのような問題を抱えている人と手を組みますよね。でもそれはその母親だけの問題ではなくて、あるいは仲間だけの問題ではなくて、介護の問題をど

うすれば良いのかと広がらざるを得ないのです。そういう人たちとどんどん手を組んでやっていく。そのような発想がいいのではないか、それはいつも自分が何かするということを前提にするからです。どうすればいいか考えざるを得ないからです。だからこのようなあり方を、もう一回考えてみたらいいのではないかと思うのです。それは要するに向き合うということです。向き合うためには自分がそこへ出向かなければいけない。嫌な問題でも、つらい問題でも、まさにその場に居なきゃいけないですね。相手と対峙する。でも対峙することによって何かが生まれるはずだということです。

コミセンのことをみんなで考えよう

では最後、皆さんに考えていただきたいことがあります。結局、コミセンですね。武蔵野市の場合には、このコミュニティセンターが、どれだけ活用されるか、可能性を持っているかが鍵なのです。皆さんに考えていただきたいのは、コミセンも人が集まらない所が多いのです。集まっている所もあるけれども、集らないところも多い。どうやって広げればいいか、まさにコミュニティ評価ですよね。中心になる人が若返らなくて困っている。人が来ないのだから若返るわけがないんですよね。コミセンをどうすればいいか、ちょっと皆さんのお知恵をお借りしたい。つまりコミュニティセンターを地域の拠点として、つながる拠点として、人々が向き合う拠点としてね。例えば事業でもいいですよ。機能でもいいですよ。どのようにコミュニティセンターを、作り変えていけば、あるいは作っていけば、武蔵野につながりが生まれるのか、そのようなアイデアを最後に皆さんに出していただきたいと思います。ものすごく難しいけれども、大事なことですので、ぜひアイデアを出してください。よろしくお願いします。

■ グループ発表

第1グループ

・コミセンは何を大事にしたら良いのかということで、どこのコミセンも主体的に場所貸し部屋貸しはしている、しかしそれ以外のところでの違いがある。

・地域に開くというところで、地域に開ききっているのかどうか。

・窓口業務を行うと対価が入り、ボランティアという意識付けのところが変わっていってしまっているのではないか。

・考え方がたくさんあるのでわかりにくくなり、やりにくくなるようなことも出てきている。では、コミセンは必要なのか?何のためにあるのか?もう少し掘り下げて、議論したい。

・また、イベントを通じてどのようなことをしたいのか、その地域に合せてイベントを行いながら、何をするのか。イベントを通してどのようなことを訴えるのか。あるいはイベントをした後、どのようなことを成果として得たのかを議論するところがあまりない。
・コミセンの中ででも、異論を大事にし、話し合い分かち合うようなことになっていくと、もう少し発展していくのではないか。

第2グループ

・私は、コミセンにはかかわっていなくて、地域社協吉西福祉で介助をしています。やはり地域社協でも居場所づくりが課題になっています。コミセンは地域によっては場所が悪くて、吉西は吉祥寺や本町の端の方なので、居場所としてのサブコミセンみたいなのが欲しいですね。本町界隈には「ひびのさんち」とかテンミリオンハウスもありません。
・市民社協で情報を交換した時に、南町が丁目活動で、喫茶店を借りてお茶を飲む会をしていることや、けやきコミセンがしている「美味しいコーヒーを入れる会」も居場所のひとつ。「ひびのさんち」みたいなのばかりではなくて、小さなものでもいいんだよということを皆さんに伝える役をしている。

第3グループ

・コミセンによって、地域のエリアの壁があったり、壁のないコミセンがあったり、それぞれに特徴があるのですが、それぞれのコミセンの特性を生かした地域づくりということだと思います。地域拠点づくりとしてのコミセンの可能性というのをこれから探って行きたい。

第4グループ

・境南コミセンは運営委員会を個人ではなく団体代表でやっている。団体が中心になってうまく回っている。
・活性化のために喫茶店づくりや、みなさんと食事をして、何世代でも仲良くなれるんじゃないか。
・地域福祉を市とコミセンで、同時にやろうとしていた時期があったようですが、その時に、地域のコミセンで福祉のことを開いたことによって、市役所まで行く必要がなくすごく楽だった。福祉を充実させていくために、コミセンでやっていったら、一番いいんじゃないかなという案です。

第5グループ

・人がなかなか集まらないというは、ひとつにはコミセンは自分が、使いたいときに使うだけの場だと思っている若い人たちがいること。使うだけ使って、運営委員にはなってくれない。

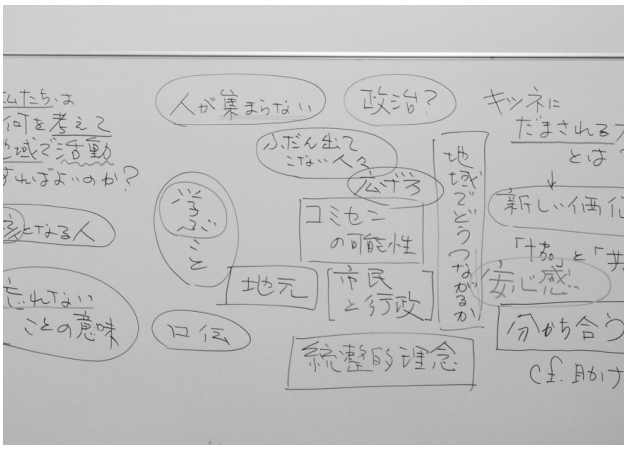
・もうひとつは若い人たちは自分のことで忙しいから、そこにはかかわっていられないのではないかということ。

・自分たちがここの運営委員となって、何かできるかがわからないようだ。やはり広報が足りない。これはどこでも言われていますが、南町では毎月ニュースを全戸配布しています。だからといって運営委員になる方が増えるわけではありません。そのことを考えれば、もう少し広報の仕方を工夫しなければいけないのではないかと思います。

・途中の話でヒントが出たのですが、ある保育園の方が何かを借りたいと思ったけれど、そこの地域ではなくて他のコミセンに借りに行かれたとのこと。自分たちに近いコミセンの敷居が高かったということ。

・これも南町のことなのですが、3・11のときに利用者を泊めたことを良かったねと言われた。そのことを考えるといろいろな方が来てくださって、運営に関ってくださればもちろん一番いいのですが、今できることをできるだけやって、皆さんにだんだん引き継いでいければいいのかと思います。

キーワードとしては、私たちは、来た方を受け止める。拒否しない。そのような所から、コミセンはやっていこうじゃないかということになりました。



朝岡先生のまとめ

コミュニティセンターが鍵

とってもいいアイデアが出そうですね。今日出されたものも共有していただいたらいいと思います。というのは、本当に武蔵野の場合は、コミュニティセンターがどれだけ、地域のつながる拠点として、うまく機能するかどうかが鍵なのです。これをどうするかということをみなさんがいつもアイデアを主体的に出し合っていくことですね。簡単に合意できないのはわかっているのですよ。だけど、失敗してもいいから、ひとつでもふたつでもやってみることですね。

本当は自己紹介の中で、やるべきだったのかもしれませんが、実は府中市の三つ審議会の会長をやっているんですよ。府中市の総合計画の審議会の会長です。大事なことをやっているなという意識はあるのです。二つめは、私は環境をやっているでしょう。当然のごとく環境審議会の会長もやっています。三つめ、市民活動推進協議会の会長というのをやっているのです。

来る人を拒まない場所

府中駅を見ていただくとわかるのですが、南側に一角だけ、まだ高層ビルが建っていないところがあります。そこに高層

ビルが建ちます。4階までは商業スペースで、7階以上はマンションなのです。5階・6階のフロアを市が買い取って、三つの機能を入れようとしています。ひとつは市民活動の支援センター機能、二つめはコミュニティセンター機能、三つめは小ホールですね。この三つの機能を二つのフロアに入れ込んで、それ以外に行政情報センターが入るようです。そこでどのような設計にして、どのような使い方にするかというのを協議しているのが、今言った市民活動推進協議会の仕事なのです。私そこの会長で、そこの議論をしているので、いろいろな地域でそのようなコミュニティ機能や支援機能を見て回っています。武蔵野プレイスも行きましたよ。入るまで気がつかなかったのですが、あそこ図書館なのですね。ある意味居心地がいいですよね。

最後に発表された方が言われた、受け止める、拒否しない。僕はこのことは崩さないでと言っているんです。府中市も武蔵野市も公共施設はいっぱいありますね。コミュニティセンターもいっぱいあるので新しいのを作っても意味ないし、すごく場所もいいし交通の便もいい、同じようなものを作らないとすると、どこに特徴を持たせるかというと、来る人は誰も拒まないということです。もちろん来る人をみんな受け入れていたら、オーバーフローしますよね。オーバーフローしないために何が必要かというと入り口にしちゃえばいいんだと。誰がいつ来てもいいですよ。だけどここに居つづけるということを考えないで、ここからちゃんと他の所へ出口があって、しかるべき所へつなぎますよ。とにかく居場所がない方は来なさい。と言っています。そこに来る人も来ていいし、そこをきっかけに、他の所とつながってもらう、とにかくそのようなスペースにしたい。武蔵野プレイスほどおしゃれな建物になるかどうかわかりませんが、今その準備をしているのです。

ぜひコミュニティセンターも地域限定かどうかは別にして、誰が来てもいい、やることがなくても来てもいい、だから来なさい。そのようになっていくことをぜひ期待したい。そのためには、かなり批判されるかもしれないが、突飛な発想があってもいいと思います。

「安心して怠けられる会社」と「安心して家出できる保育園」

私、非常に感銘を受けたキャッチフレーズが、二つあるのです。ひとつは、「安心して怠けられる会社作り」という方針を持っているところがあったのです。これは北海道の浦河にある「べてるの家」です。障がいをもった人たちが作った会社で、成功しているのです。私が1回見に行ったら、会社の今年の方針は「安心して怠けられる会社作り」ですと言われてね。うぉーって、もうなんとも言えませんでしたね。

もうひとつ、和歌山大学の学長の山本健慈さんという先生が、大阪の熊取町のアトム保育園の理事長さんなんですが、「安心して家出できる保育園作り」がコンセプトです。地域とのつながりが強いからでしょう。だから、このような突飛に見えるかも知れないけれど、これぐらいのことを皆が楽しく言い合いながら、全ての地域の人たちを、受け入れられるような、コミセン作り、あるいは地域づくりを、みなさんが工夫されることを、期待して私の話を終えたいと思います。どうも長い間ありがとうございました。

Ⅱ

資料

市民学習会アンケート

第一回　2011／2／9

●忘れないことは大事であることを理解した。到達できなくてもそれに向かって努力することが大切だということがわかった。地域活動にもつながる。

●「分かち合い」もとは悲しみを分かち合うことだということ。その通りだと思う。腑に落ちた感じです。

「公益」は誰がはかるのか？それは市民一人一人が考えて決める。考えて活動していくことで社会の公益性が上がる。私たちがとても責任ある立場にあって生きているんだと自覚しなければいけないのだなと思う。努力すること、学ぶ努力、他社を思いやる努力、分かち合う努力、忘れない努力、ですね。ありがとうございました。

●充実していました。感動しました。ありがとうございました。

●大変勉強になりました。

●「分かち合い」「絆」、地域のコミュニケーションを再考したいと思います。

●「分かち合い」が共助とすれば、現在問題と思われるのは「公助」が果たすべき要支援者リスト作成等でネックとなる個人保護法との関係である。先生からこの点についての見解をコメント戴きたい。

●世代をこえたコミュニティをどのようにしていったら良いか？という事を、あらためて考えていきたいと思いました。

「分かち合い」について今後も考えていきたいと思います。

●朝岡先生のお話はわかりやすかったです。コミュニティは個人の考え方でさまざまな可能性が有ると思います。今は災害時、自助・公助が求められているようにコミュニティ活動も、もっと自主性を出し活発になると良いと思います。

●社会サービスは「悲しみの分かち合い」ということを知ったのが成果でした。

●朝岡先生のお話は良かった。明日にも期待します。グループ討議は少し無理では？　先生のお話をもっと時間をとっていただいては？

●「分かち合い」という言葉が印象的でした。そしてそれが悲しみの分かち合いということも。3・11がなかったら、この会に出席しようとは思わなかったと思います。明日も楽しみです。

●「分かち合い」は難しいことと感じます。具体的な筋道を知りたいのですが。

●悲しみの「分かち合い」が福祉の基本というお話を伺って、たしかにその通りと、様々なパズルの破片がピタリと収まって1つの絵になった気がした。つらい時に、救いの手を差し伸べられた喜びの方が、楽しみを共有したことよりもよく覚えている。また人類がルーツをたどると1つにたどり着くと聞き、この学習会に集まったすべての人、道で出会うであろう人々と握手したくなった。一人暮らしの高齢女性なので、1日誰とも話をしない日も多いが、もっともっと人のいるところへ出て行こうと思うようになりました。軽快で分かりやすいけれど、とても高級なお話を聞き、

学ばせていただき、学生気分も味わうことが出来、大変有意義な時間でした。これをこれからの日常に生かし役立てていこうと思います。ありがとうございました。私はチェルノブイリの頃、5年にわたり反原発の活動をしました。今さら何を…と思っています。

●構成的な理念と統制的な理念の話は興味深かった。統制的理念が「理想の自転車操業」だと理解しました。絶望しないでやってゆきたい。分かち合いとは最小不幸社会のことか？

●分かち合いの意味の深さを学びました。評価についても分かりました。とても分かりやすいお話でしたね。

●親しみやすい口調でお話しされる朝岡先生の講座に参加できて良かったです。
「分かち合い」は今活動していて実感しています。今日のお話は私の頭の中で消化できていませんが、明日また参加し、消化できればと思います。

●ありがとうございました。少しずつ解ってきました。
今後とも、機会があれば参加させていただきます。

●大変楽しく伺うことが出来ました。「分かち合い」読んでみたいと思います。
どんなにしても人だと思うのと話し合ってよいつながりをしていきたい。

●「キツネにだまされなくなった」事と、水洗トイレの普及も関係がありそうな気がします。
グローバリゼーションと対極にあるもの、ひとのにおいとか醸し出す雰囲気とか…。
人間の脳の中で使わないでいる部分をもっと刺激したいと思いました。

●「分かち合い」この言葉をこれから思いながら暮らしていきたいと思います。

●「分かち合う」ことの大切さがよく分かりました。市民、行政がそれぞれの立場で、多様性を認め、地域での活動が活発になるといいなと思いました。

●グローバリゼーションの中で多様性をどう守るか、その多様性の大事さを理解する、理解させるのはとても難事です。あわせて、公共の意識を共通の理解まで高めることも大事です。
頭ではあるいは言葉ではわかっても、いやなものは自分の前にはあってほしくない…というのが多すぎます。コミュニティ協議会はどこまでこの公共を共有できるよう、地域が耕せるのでしょうか。希望がないわけではない。

●学習会に参加して、分かち合いが大切であること。

●先生のお話はとても分かりやすく、とても今後の活動に役立つと思います。
分かち合い→福祉に結びつくし、人類がこの気持ちがあったために生き残ったことなど本当に勉強になりました。また震災についても忘れない事が大切という事も地域に帰って話したいと思いました。

●3・11からもうすぐ1年がたとうとしています。生活の面でも気持ちの面でもいろいろ考えさせられることがありました。今日の朝岡先生のお話を聞いてこれからのコミュニティづくりに参考になりそうな事が多くありました。「分

かち合い」についてもっと考えていきたいと思います。ありがとうございました。

●朝岡先生は教えるもの、自分のやりたいことをもって、わかりやすくお話になって良かったです。

●全てのお話が全てのことにつながって行くことを感じました。

公益は市民＝私がつくる。一人一人が公益を考えることで「公」は何かを知れると思います。

●楽しいお話でした。目的に向かって話し合っていくことが大事。学びほぐしあいながら、みんなで前進していきたいですね。キツネにだまされたいです。

●いつものことですが、朝岡先生のお話にはうなずくことばかりです。この3番では公益ということについて話し合いました。ここでもいい勉強になりました。明日は残念ですが来られないと思います。

●1年経って、少しずつ薄れてきてしまった震災の記憶をもう一度思い出して、他の方々と共有できたこと、朝岡先生からたくさんの事を学べたことが非常に良い時間となりました。ありがとうございました。

●面白く、しかしいろいろなキーワードで触発されるものが多かった。「悲しみ」を知ること、目指すこと、忘れないこと、お互いに考えあうことの大切さを思いました。

●地域住民として、コミセンのあり方が気になります。ネットワークの一員として自覚してほしい。災害時、二次的避難所になってほしい。今日はもう少しコミュニティの事、聞きたかったです。明日、よろしくお願いします。

第二回　2011／2／10

■コミセンの活性化について、これから考えていく必要があると思います。皆さんのお話を聞いて色々学べました。武蔵野だけではなく、いろいろな市でやっていけたら良いと思います。

■向き合うのが面倒くさい、向き合わないで生活していきたいと思う人が増えているように思います。私もずっとそうでした。東京に来て、人との関わりが薄いことがラクでいいなーと思っていました。でもそれではいけないと、3・11を経験して思いました。パリでも数年前、夏の暑さでたくさんの高齢者が孤独死したことをキッカケに住民祭というのが盛んになりました。東京も一人一人が考えて地域力を高めるときではないかと思います。向き合う勇気を持ちたいと思います。

■地域のこと、unlearnしていこうと思います。ありがとうございました。

■同じ考えの人と向き合ってグループを作っていく他ないというお話、その通りで、グループの人の大多数の人にニーズに合えば多数集まる。その通りで、20人未満の会「昭和会」をやっていますが、リーダーは持ち回りなのでうまくいってます。

■いろいろなコミュニティセンターのお話を伺うことがとても有意義な時間を過ごさせていただきました。朝岡先生の「所作で伝える」「向き合う」という言葉が印象的でした。お話もとても分かりやすく良いお話を聞かせていただきま

した。ありがとうございました。
「受け止める」「拒否しない」全ての人を受け入れることはむずかしいことと思いますができれば良いなと思います。

■本日は昨日と違って、社会の動きや仕組みについてもお話を聞けてとても楽しい時間でした。普段あまりコミセンを使えていない立場から実際に運営している方々がそんな思いで取り組んでいらっしゃるかを聞くことが出来たのも、とても良かったです。

■コミュニティ協議会の若返りばかりは考えても考えても難しいです。年は別として、主体的にというか、これが必要だということを仲間をつくって展開できる場であることを保持したいと思う。コミュニティと若い人とのかかわりは、とにかく長期、長い先にわかって（どこでもいいので）地域での共生に参加してくれればと思う。

■忘れないことは大切ですね。行動が変わったらワカルなんだということが納得でした。
地域通貨はいつまでたってもワカランです。
本日は会場が狭いこともありますが、始まったら受付は外に出した方が良いと思います。気になさっている方がいらっしゃったので。